

# 続片輪車蒔絵螺鈿手箱の流転

梁 瀬 健



片輪車螺鈿蒔絵手箱の流転

私は、りずむ第三号に「片輪車螺鈿蒔絵手箱の流転」と題して、一文を載せた。それから一年の間に、新しい資料二つが見つかった。ここに、一部を手直しする必要が生じ、重複するところもあるが、改めて続編として公開したい。

国宝「片輪車螺鈿蒔絵手箱」、私がこの平安期の手箱に関心をもったのは、三十年以上の昔、古書で求めた「日本名宝物語」（読売新聞社、昭和四年刊）を読んでからである。手箱の流転は次のようにまとめられている。

江戸時代の末に、法隆寺の財政が逼迫し、これを見かねた海の豪商銭屋五兵衛が、多額の寄進をしたので、法隆寺はそれに酬いるため、この手箱を五兵衛に贈った。一説には五兵衛が買い取ったともいわれる。その後、五兵衛は加賀の河北潟の干拓仕事を請け負ったが、この最中、猛烈な



小倉常吉  
(撮影年月不明、50才代か)

流行病が発生した。その病気は河北潟の魚がもたらしたもので、五兵衛が魚に投毒したという嫌疑をかけられ、さらに密貿易の疑いから、嘉永五年春に裁判となった。そうして關所の判決が下った。この時没収された家産の中に、この手箱もあった。五兵衛は、嘉永五年十一月に八十二歳で獄死した。手箱は徳川家からある大名へ下賜されたが、その大名の末が、大正十二年に家政整理をした時、小倉常吉に二十六万円（現在の二十億円以上）で渡したというのである。

私は、この大名が誰なのかを知りたいと思っていたが、

毎日新聞社の「原色版国宝」（昭和五十一年刊、文化庁監修）に雲州松平家旧蔵と出ているのがわかった。雲州松平家とは、松江藩の松平である。文化庁監修ということでは信用した。それでは、いつどのような理由で徳川家から松江藩に下賜されたのか。松江藩は九代斉實の時に、十二万両を徳川幕府に献金している。千両箱百二十箱、江戸時代末の一両は、現代のおよそ十万円に相当するので、千両箱は一億円、松江藩は幕府に百二十億円もの献金をしたことになる。お返しを二割とすれば、手箱の価値はこれにほぼ等しい。私はこの理由付けによって手箱は幕府から松江藩に渡ったと推理した。年は下り、大正十二年になってこの手箱を松平伯爵家が売り立てに出した時、石油王小倉常吉が二十六万円という非常に高嶺で落札し、世間を驚かせたのである。文化庁には、手箱を国が昭和二十七年に購入したということ以外の記録は残っていない。文化庁から東京国立博物館に移管されたのは、昭和三十一年である。

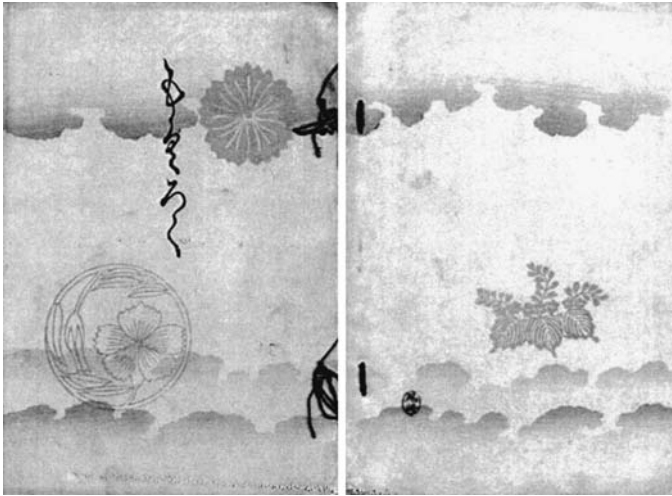
小倉常吉とは、どのような人物であろうか。常吉は、慶応元年、武蔵国深谷ふかやに生まれた。柴崎宗十郎、美代子の三男である。十二歳の時、上京して長谷部油店に丁稚奉公した。長谷部油店は、江戸時代から代々喜右エ門を称し、油

問屋として一流の老舗であった。店員には盆暮れ以外の休日はなく、夜間の外出さえ禁じていたが、十六歳以上の者には信仰の時間として、朝七時までは自由が許された。常吉は、毎朝三時に起床し、勉強に励んだ。十八歳の時、兵役を免れるため、小倉伊助の養子になっている。二十二歳の時、支配人に抜擢されたが、長谷場商店が店を閉めることになって、二十五歳で独立し、小倉油店を開業した。そうして、植物油から石油業に転進し、ついに石油王と言われるほどに成功した立志伝中の人物である。常吉には二人の養子があった。相続人房蔵は男爵団琢磨の三女壽美子を迎えており、これ以後団男爵の影響もあって、常吉は骨重の名品ばかりを蒐集するようになった。常吉は、昭和九年



小倉房蔵

に亡くなり、小倉石油は昭和十六年に日本石油と合併し、小倉の名は消えた。「日本名宝物語」にも、「小倉常吉伝」



旧松平伊賀守御蔵品入札 荷主：松平子爵家（旧上田藩主）

にも、この手箱の写真が出ているが、相続人房蔵から国へ納められたと思われる。

私は、ここまでの経過を奈良新聞のコラムに「片輪車螺鈿蒔絵手箱」として執筆した。これを読んだ東京国立博物館の竹内奈美子工芸室長が、文化庁で大正八年の東京美術倶楽部の「売り立て目録」を見つけ出したのである。それには、松平伊賀守御蔵品入札として、手箱の写真も出ている。この松平とは信州上田の松平子爵である。これは決定的な証拠である。

さらに、河田貞の「二つの片輪車蒔絵螺鈿手箱」（國華一〇九八号）には、次のようにある。「流水に乾きを癒やす御所車の雅びな風情を意匠化した東京国立博物館の二合の片輪車手箱は、一つは平安時代後期、他は鎌倉時代前期の制作に比定され、いずれも国宝に指定されている。前者は淀屋辰五郎愛蔵の品であったとの伝承を伴い、さらに遡れば身底裏に刻された法隆寺比丘尼の銘からも、古くには法隆寺の什物であった可能性を多分に示唆しているのである。一方後者は雲州松平家の家宝として伝えられ、古くから世に聞こえた名品であった。以後、前者は信州上田の松平子爵家から小倉常吉を経て国有となり、後者は雲州松平

家の直系直亮の時に小倉武一の所蔵に移り、さらに前者同様東京国立博物館の保管するところとなったのである。」つまり、問題の手箱は、大正八年に雲州松平家ではなく、上田松平家から小倉常吉に渡ったのである。

また、六角紫水著「東洋漆工史」にも、この手箱は大阪の淀屋辰五郎（岡本三郎右衛門広当）の所有であったが、淀屋が宝永二年に闕所になった時、大坂城代であった上田城主松平家に渡ったとされている。淀屋には、骨董商が入りし、古物、珍器、名画、墨跡を集めていたという記録がある。以上のことから、読売新聞社も毎日新聞社も、この二つの手箱を取り違えたと思われる。

私が持っている「淀屋辰五郎欠所之内家宝之分」という古文書には、手箱の記録はない。その序には、淀屋の家宝は、宝永二年五月、四代將軍綱吉の時、大老松平美濃守に渡ったものという記載がある。

このほど新しい二つの古文書が見つかった。その一つ「宮下弁寛文書」には、手箱は享保四年に京都所司代松平忠周（上田松平第三代）が落札により入手したと書かれている。それも淀屋ではなく、京都の深江庄左衛門が闕所になった時の道具であったという。さらにその落札値は、銀

二十八貫七百九十匁九分五厘と詳しい。当時、淀屋辰五郎が、一年半の間に、一万貫を遊興費に使ったとして闕所の憂き目にあっているが、この一万貫は現在の百億円に相当するという。そうなると、銀二十八貫余はおよそ三千万円である。もう一つの文書は、「翁草巻十」で、原文には次のようにある。「享保のはじめ、京都町人銀座年寄中村内蔵助、深江庄左衛門、関善左衛門、中村四郎右衛門事、奢超過によって、関東の御沙汰として、右四名遠島」つまり、贅沢が過ぎるので、島流しにするというのである。皆、この沙汰に狼狽したが、中にも深江庄左衛門の妻は動顛して自殺したと書かれている。没収された家財の中に、天下の名器が多数含まれていた。金銀は意外に少なく、四人合計で十万両ほどであったという。銭屋五兵衛といい、淀屋辰五郎といい、深江庄左衛門といい、金持ちを闕所にすること、幕府や大名の借金を棒引きにする演出なのであるろうか。

時系列でまとめてみると、深江庄左衛門の闕所が享保四年、銭谷五兵衛の闕所が嘉永五年であるから、法隆寺から五兵衛に手箱が渡ったというのは矛盾がある。五兵衛が関わったとすれば、それはもう一つの鎌倉期の手箱かもしれない。

ない。法隆寺から五兵衛に渡ったという話は、読売新聞社の「日本名宝物語」だけであるので、これは単なる歴史的逸話であろう。

私なりの総合判断として、①法隆寺、②深江庄左衛門、③上田松平家（第三代忠周）、④小倉常吉、⑤東京国立博物館という流れになる。①と②の間には何人かの介在があるはずである。

なお、小倉常吉が落札した金額は、二十四万九千百円であることもわかった。

#### 参考文献

- 日本名宝物語 読売新聞社 昭和四年
- 原色版国宝 毎日新聞社 昭和五十一年
- 旧松平伊賀守御贓品入札目録 大正八年
- 小倉常吉伝 昭和五十一年
- 六角紫水 東洋漆工史 昭和七年
- 河田貞 二つの片輪車蒔絵螺鈿手箱 国華第一〇九八号 昭和六十一年
- 宮下弁覚文書
- 翁草巻十